

取消理由通知書 発送日14年10月25日

特許異議申立の番号	異議2002-71200
(特許の番号)	(特許第3228921号)
起案日	平成14年10月 8日
審判長 特許庁審判官	沼沢 幸雄
特許権者	イビデン株式会社 様
代理人弁理士	安富 康男(外2名) 様

本件の「請求項1及び2」に係る特許は、合議の結果、以下の理由によって取り消すべきものと認める。これについて意見があれば、この通知の発送の日から60日以内に意見書の正本1通及びその副本3通を提出して下さい。

理 由

1. 証拠

刊行物1(証拠1):特開平9-315867号公報(異議申立人日本碍子(株)の甲第2号証)

証拠2:「化学分析結果報告書」(異議申立人日本碍子(株)の甲第3号証)

2. 証拠の記載事項

(1) 刊行物1:特開平9-315867号公報

(ア)「本発明の課題は、高純度であって、かつ低い体積抵抗率を有する、新規な窒化アルミニウム焼結体を提供することである。」【0009】

(イ)「また、本発明の課題は、こうした窒化アルミニウム焼結体からなる半導体レベルの体積抵抗率を有する新規な電子機能材料を提供し、かつこの窒化アルミニウム焼結体を使用した静電チャックを提供することである。」【0010】

(ウ)「次に、表7、表8の実験番号51~63の各窒化アルミニウム焼結体を製造した。原料粉末としては・・・窒化アルミニウム粉末を使用した。・・・イットリウムの硝酸塩をイソプロピルアルコールに溶解させて添加剤溶液を製造し、この添加剤溶液を窒化アルミニウム原料粉末に対して・・・混合した。 Y_2O_3 に換算したイットリアの添加量を、表7に示す。」【0116】

(エ)「こうして得られた各焼結体について・・・焼結体中のイットリウムの含有量(Y)、・・・全炭素量(C)・・・を、表7に示す。・・・また、各焼結体について・・・色彩を、前述したようにして測定し、その結果を表8に示す。」【0118】

(オ)【0120】【表7】の「No. 51比較例」には「Y含有量」が「36900ppm(3.69重量%)」、「C含有量」が「0.03重量%(300

ppm)」と記載されている。

(カ)【0121】【表8】には、「No. 51比較例」について「(焼結)最高温度」を1750℃に5時間キープして、「色彩」が「黒色」の窒化アルミニウム焼結体を得た旨記載されている。

(キ)「そして焼結体の体積抵抗率は、比較例51においては $10^{14} \Omega \cdot \text{cm}$ 台であり」【0123】

(2) 証拠2:「化学分析結果報告書」

証拠2は、上記刊行物1の発明者である「勝田祐司」が上記刊行物1第15頁の表7の「No. 51比較例」の試料についてX線回折チャートを測定したもので、特許異議申立人日本碍子株式会社提出の「特許異議申立書」の第18～19頁の「(9) 甲第2号証についての実験報告」の欄において次のとおり説明している。

即ち、証拠2の「第3頁の最も上段のチャート(AB1133)が、実験番号51の試料のチャートであり、同チャート中の「□」は $\text{Y}_4\text{Al}_2\text{O}_9$ のピークであり、同第4頁は第3頁のチャートの部分拡大図である。これらのチャートからカーボン相の特徴的ピークは存在しない。また、同第9頁は、実験番号51の試料のX線回折チャートのみを抜き出したもので、第10頁は、第9頁のチャートに加えて、JCPDSカードを用いた各ピークの同定結果を示すものである。すべてのピークが同定されているが、やはりカーボン相の対応ピークは存在しない、と説明している。

3. 当審の判断

(1) 本件発明1について

上記刊行物1の記載を本件発明1の記載ぶりに則って整理すると、刊行物1には「窒化アルミニウムマトリックス中に、300ppmのカーボンと、3.69重量%のイットリアとを含有し、焼結体の色彩は黒色であり、 $10^{14} \Omega \cdot \text{cm}$ 台の体積抵抗率を有し、静電チャック等に使用できる窒化アルミニウム焼結体。」の発明(以下、「刊行物1の発明」という)が記載されていると云える。

そこで、本件発明1と刊行物1の発明とを対比すると、(i)窒化アルミニウム焼結体に含有されるカーボンについて、本件発明1では「X線回折チャート上ではピークが検出できないか、検出限界以下であるカーボンであって、窒化アルミニウム結晶相に固溶したカーボンを含有する」と規定するのに対して、刊行物1の発明ではカーボンの形態について明示的記載がない点(以下、「相違点1」という)(ii)本件発明1では上記焼結体の使用温度を「100～1000℃」と規定するのに対して、刊行物1の発明は「静電チャック等」の用途を記載するに止まり、使用温度を明示していない点(以下、「相違点2」という)でそれぞれ相違していると云える。

まず、相違点1について検討すると、刊行物1の発明(No. 51比較例)の追試結果である上記証拠2によると、窒化アルミニウム焼結体についての「JCPDSカード」の各ピークが同定されているが、カーボン相に対応するピークは

認められない。そして、刊行物1の発明の焼結条件である「1750℃の焼結最高温度に5時間保持したこと」を考慮すると、得られた窒化アルミニウム焼結体中の「カーボン」の少なくとも一部は固溶していると解するのが相当である。

してみると、両者は、上記相違点1で区別することができない。

次に、相違点2について検討すると、本件特許明細書の段落【0152】には、「この静電チャックの吸着力を測定した。室温から300℃まで100℃間隔で吸着力を測定したところ、いずれの温度においても、60～100g/cm²の吸着力を示した。」と記載されているから、本件発明1と刊行物1の発明とは、上記相違点2でも区別することができない。

してみると、本件発明1は、上記刊行物1に記載された発明であるか、又は上記刊行物1に記載された発明に基づいて当業者が容易に発明をすることができたものであるから、本件発明1の特許は、特許法第29条第1項第3号又は同条第2項の規定に違反してなされたものである。

(2) 本件発明2について

本件発明2は、本件発明1の焼結体に配合する焼結助剤を具体的に規定したことを特徴とする窒化アルミニウム焼結体であるが、その中には刊行物1の発明で使用されている希土類酸化物が含まれているから、本件発明2と刊行物1の発明とは、この点でも区別ができない。

してみると、本件発明2の特許も、本件発明1の特許と同様、特許法第29条第1項第3号又は同条第2項の規定に違反してなされたものである。

なお、異議申立書の内容を併せて検討されたい。

この通知に関するお問い合わせがございましたら、下記までご連絡下さい。

審判部第17部門 沼沢 幸雄

電話03(3581)1101 内線3717

ファクシミリ03(3580)8013